

○課題報告Ⅱ

現段階日本資本主義における小農民経営と村落

東 敏雄（茨城大学）

1. 問題提起
2. 小農民経営と村落

—従来の議論からの批判的継承—

3. いわゆる現段階の段階的・類型的特徴と小農民経営
4. 小農民経営の実態と村落構成員の性格

—若干の事例をとおして—

まず共通課題として与えられている「現段階における都市と農村」とわれわれの表題との関連について述べておくことが必要であろう。それはとうぜんわたくしなりの関連づけであり、したがつて経済学の分野からの報告という意味における問題の限定と言いかえてもよい。

「現段階」については昭和三〇年代以降現在に至る高度経済成長期と把握しておきたい。その間の一〇数年における時期区分、およびこの期間を現段階というその根拠については別に述べたい。ともかくこの限定された期間—現段階における都市は、その段階的な特徴を大量生産方式の確立を前提とする巨大独占資本を中心とする資本と労働の巨大な地域的集積およびそれとの関連に求めることができる。その他の諸々の特徴たとえば中小零細企業の構造的な定着、人口の巨大集住、それを前提とし相互規定関係をもつ膨大な第三次産業群の存在、行政機能の周辺地域への結集、再びそれに基づく企業および人口の結集等々も、この基本的特徴と

の関連において理解すべきであろう。したがって、農村との関連で現段階の都市を考えるばあい、巨大独占資本ないしはそれをめぐる蓄積構造と農村との関連が明らかにされなければならないのである。

しかももまず、考慮されなければならぬ関連の対象は空間としての農村それ自体にあるのではなく、農村の中心的な構成主体としての小農民経営に定められなくてはならないであろう。空間としての地域の性格は主体の性格によって決定されるからである。そしてまた小農民経営内部の非農民的要素、あるいは他産業業就業者によつて示される村落の非農民的要素も、小農民経営との関連を論理的に媒介して検討されるべきであろう。他面において資本による、あるいは資本を代弁する権力による土地取得あるいは収用等は農業から生産の場を奪うものとして空間としての農村に対し直接的な対抗的関連をもつてゐる。それさえも小農民経営の性格変化を媒介として、われわれの限定した意味での「都市」と農村の関連を形成するはずである。

もちろんわれわれも、都市と農村との関連を資本と農業、その現段階的把握としての巨大独占資本の集結点ないしはそれとの関連としての巨大都市と小農民的経営の再生産基盤、その変化、とおきかえることによつて都市と農村との関連の総てが明らかになるとは考えないのである。上述した意味での巨大都市とは別の地方的中心都市、あるいは地方都市の巨大都市との関連における位置づけ等も問題の対象をなすはずであるし、それを別としても都市と農村との関連はより多様でありうると予想する。しかし、資本主義社会の中において「現段階」という歴史的形容を付して都市と農村との関連を考えるばあい、基本的関連として前述したような内容を考えるべきであると

思つてゐる。予想される多様な関連もこの基本的関連との関係において位置づけるべきであろう。

本報告はこのようないきわめて具体的な関連を予測しつつも表題によって示された範囲に問題を限定するものである。

以上のようく問題が限定されたとしても、まずそのような問題点が近年、村落研究会の中で模索し続けられた課題とどのように接続するのか、つまり肯定的であれ、否定的であれ、批判的であれ、その本報告における継承が明確にされなければならないであろう。そしてそれに立つて、われわれの限定された問題点が現段階においてどのような意義をもつのかが明らかにされなければならないであろう。そしてこのような中で明らかにされる都市と農村との具体的な関連を対立と呼ぶかあるいは別の表現をもつてするか、それはむしろ後の課題といえるのではないか。